



鄭代表(右)と田中理事長(中央)。「中国では視覚障がい者への偏見が残り、福祉制度も整っていない。そんな環境の中でも活動を続ける紅丹丹を今後も支えていきたい」と田中さん

音声図書でより幅広い情報を

人間が得る情報の約9割が「目」からだといわれる。生まれつき目が見えない人、事故や病気で視力を失った人…。彼らは、ごく当たり前の生活すら難しい上、読書やテレビ、映画などの娯楽の機会も限られてしまう。

こうした視覚障がい者の生活に不可欠なのが点字だ。また、「音声図書」と呼ばれる、本や雑誌の文字・図などの情報を音声化した「録音図書」、テレビや映画など主音声だけでは伝わりづらい人物の動きや情景を副音声で説明する「音声解説」は、視覚障がい者の「目

となり、点字よりも幅広い情報を彼らに伝えている。

この音声図書を2万タイトル以上所蔵し、その製作や貸し出しを通じて、視覚障がい者の人たちをサポートしているのが、東京都高田馬場にある社会福祉法人日本点字図書館だ。1940年の設立以来、70年にわたって視覚障がい者福祉の向上に努め、近年は音声図書をさらに普及すべく「デジタル録音図書」の製作に力を入れる。カセットテー



日本点字図書館で、図書貸し出しサービスの利用者管理方法について説明を受ける紅丹丹のスタッフ。この図書館を含む全国の点字図書館では、来館者への貸し出しのみならず、全国の利用者への郵送サービスも無料で行っている



国際協力の担い手たち

社会福祉法人 日本点字図書館

当たり前の毎日を視覚障がい者に

日本点字図書館は、5万タイトルに上る点字・音声図書を所蔵する、国内最大の視覚障がい者向け施設。70年にわたり培ってきた視覚障がい者福祉のノウハウを生かし、中国・北京市で音声を使ったサービスの普及に取り組む人々を支えている。



タイマーに音声をつけるなどの工夫が凝らされている視覚障がい者用に開発された調理器具など。日本点字図書館で販売されている



紅丹丹の編集ルームで録音図書の編集技術を学ぶスタッフたち。「次はどうしたらいい?」と日本点字図書館のスタッフ(中央右奥)に次々と質問する

た田中さん。それゆえに、目の見えないうことの不自由さを痛感してきたと同時に、本や雑誌を読めることへの喜び、音声図書のありがたさを誰よりも知っていたのだ。

立ち上がった言葉の壁

プロジェクト開始から1年余り。これまで日本点字図書館のスタッフたちは2度北京の紅丹丹を訪れ、録音図書や副音声入りの映画、ラジオ番組などの製作技術を指導してきた。「日本人スタッフから学んだことを生かして、『録音ボランティア』の養成講座を開いたり、『デジタル録音図書』の製作にも着手し始めました」と紅丹丹の張新莉さんはうれしそうに話す。

しかし、「言葉の壁」に悩むこともあった。中国語が分からない日本点字図書館のスタッフたちは、「録音図書に声を吹き込む『録音ボランティア』の育成で、視覚障がい者の人たちに聞きやすくするためにどう抑揚を付けて中国語の原稿を読めばいいのかわ、うまく伝えられないこともあった」と言う。また、映画の副音声の原稿作成では言葉の選び方に食い違いも生じた。それでも、より多くのことを吸収しようとする積極的な質問を繰り返す紅丹丹のスタッフたちの情熱に押され、互いが理解し合えるまで幾度となく話し合った。「私たちの使命は視覚障がい者のサポート。この思いに国境はありません」と日本点



紅丹丹にある録音ブース。録音ボランティアがガラスの向こうで読み上げる声や音質を調整する

字図書館の島田延明さんは話す。「ここは発見の宝庫です!」今年9月、日本点字図書館での「現場」をじかに見るために来日した紅丹丹の孫志鵬さんは満足そうな様子だ。彼らは、録音・編集ルームを視察したほか、音声図書の管理方法や点字教室のカリキュラムなどについて学んだ。また、点字・音声機能などを備えた文房具や調理用具、スポーツ用品といった「視覚障がい者用に開発されたグッズ」の存在を初めて知る。「一番の収穫は、『当事者の立場になって考えること』に気付けた点です。こうした彼らの目線に立って作られたグッズを中国にも広めていきたい」と孫さんは目を輝かせる。「いずれは、パソコンなどのカルチャー教室の運営や合唱・演劇会などを開催する『総合的な視覚障がい者のための文化センター』へ成長できるよう、支えていければ」と話す田中さん。その第一歩となる「音声図書」の充実が今、紅丹丹で着実に進められている。

そしてもう一つ、日本点字図書館が力を入れるのがアジア諸国に対する支援。主に、視覚障がい者の文化・福祉の向上に貢献できる人材の育成だ。現在取り組んでいるのは、視覚障がい者を対象にメディア製作やバリアフリー施設の情報を提供している中国のNGO「北京紅丹丹教育文化交流センター」

(以下、紅丹丹)への協力。2009年6月にJICAの草の根技術協力事業を通じて「視覚障害者音声情報提供技術指導事業」を開始し、中国の視覚障がい者たちがより多くの情報にアクセスできる環境づくりを行っている。きっかけは08年、中国で開かれた「日中NGOシンポジウム」に日本点字図書館の田中徹二理事長が出席し、紅丹丹の鄭曉潔代表と出会ったことだった。「中国には1200万人もの視覚障がい者がいるそうですが、点字はある程度普及している一方で、音声図書については利用されるどころか、存在を知らぬ人すら少ないことを知りました。ならば、『日本に学びたい』という鄭さんたちの思いに応えたいと思って」大学1年生の時、病気で光を奪われ